

長野市の維持及び向上すべき歴史的風致

1 ◆ 歴史的風致に関する概要、分布状況

歴史的風致とは、歴史まちづくり法第1条において、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動と、その活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地が一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されている。

本市は、周囲を美しい山並みに抱かれる中、古くから善光寺の門前町として栄えるとともに、市域のほぼ中央で千曲川と犀川が合流して沿川に形成された肥沃な長野盆地（善光寺平）を中心に発展した都市部と山間部の双方を併せもった都市である。戦国時代には、武田信玄と上杉謙信に代表される有力者の争いの場となった。

江戸時代になると松代は、信濃の国最大の石高を有する松代藩の城下町として独自の文化と城下町が形成されて繁栄した。加えて、松代城下を通る松代道^{まつしろみち}も商品流通が活発になるにしたがって発展し、複数の宿場が形成された。また、松代の大室^{おおむろ}には、5世紀前半から8世紀にかけて築造された500余基の古墳からなる大規模古墳群があり、その周辺にも数多くの遺跡が確認できることから、この地を含む長野盆地には、古代から広域の緩やかな地域的政治圏が形成されたとみられている。

山間部には、善光寺と同じく県内外に広がった戸隠信仰の中心である戸隠がある。戸隠は、古代以降、天台密教や真言密教と神道とが習合した神仏混淆の聖地となっていた。江戸時代、善光寺参詣に訪れた人々の中には戸隠まで足を延ばす人も多く、善光寺と戸隠を結ぶ信仰の道は、戸隠古道として多くの参詣者が往来した。戸隠信仰の歴史は古く、戸隠山^{けんこうじ}頭光寺を中心にした山岳信仰に、農業神として庶民の信仰を集めていた九頭龍^{ずりゅうごんげん}権現に代表される神道が一体化したことで、独自の文化やそこで生きる人々の生業^{なりわい}が成熟した。また、鬼無里^{きなし}は、近世から近代にかけて麻の栽培が盛んとなり、麻産業で栄えると同時に、山間地の交通要路の分岐点として、九齋市^{くさいいち}（1カ月に9回開かれた定期市）が開かれ、物流や交易の場として繁栄した。

このように本市には、善光寺を中心に平安時代末期以降の浄土信仰の広がりとともに門前町として発展した都市形成の歴史があるほか、城下町や街道の繁栄とともに歴史的、文化的に発展した地域がある。各地域のまちの形成やそこで生活する人々の営みを礎に、地域固有の歴史と伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史的価値の高い建造物が一体となった歴史的風致が形成され、今日まで継承されている。

については、本市の維持及び向上すべき歴史的風致として7つを取り上げ、それぞれに建造物、人々の活動を主として以降で整理する。



2 ◆ 歴史的風致の内容

(1) 善光寺御開帳にみる歴史的風致

ア はじめに

善光寺の創建について、平安時代末期に記された『扶桑略記』（寛治8年(1094年)）所収の『善光寺縁起』によると、欽明天皇13年(552)に百済から伝えられた阿弥陀三尊を本尊とし、当初現在の長野県飯田市で祀られていたものを皇極天皇元年(642)に現在地に遷座し、同3年(644)には伽藍が造営され「善光寺」と名付けられたとされている。

善光寺の名は、貴族のあいだに阿弥陀如来の極楽浄土に往生を願う浄土信仰が広がるとともに、中央の貴族社会や仏教界で知られるようになった。また、善光寺は、天台宗寺門派の本山である園城寺おんじょうじの末寺となり、本寺の僧の中から別当が選任されている。関白藤原師通が永保3年(1083)から康和元年(1099)年までの朝廷の政務や儀式などを記した日記とされる『後二条師通記』の永長元年(1096)3月の条に、興福寺、西大寺、法隆寺における別当の名が記されるとともに、頼救阿闍梨あじかりが善光寺別当になることが記されており、これが善光寺別当に関する初見記事である。

善光寺信仰は、平安時代末期以降の浄土信仰の広がりとともに、急速に全国的な広がりを見せ、阿弥陀信仰の霊地として善光寺の名声が知れわたることとなる。また、多くの善光寺聖が御本尊の分身仏とともに全国各地を巡り、善光寺縁起を説きながら善光寺如来への信仰を人々に根付かせた。さらに、鎌倉時代以降、末法思想の広がりとともに、鎌倉幕府の善光寺保護政策により、治承3年(1179)に焼失した善光寺の再建が行われるほか、全国各地で有力御家人を檀那とした新善光寺の建立や善光寺仏の模造が流行し、鎌倉時代後期には全国各地に新善光寺が勧請され、善光寺信仰は全国に広がった。

全国から善光寺への参詣人の増加に伴って参詣路も発達した。『一遍聖絵』いっぺんひじりえ（正安元年(1299)）、『遊行上人絵伝』（徳治2年(1307)までに制作）は、文永年間に再建された善光寺や門前の賑わいを伝えている。また、『大塔物語』おおとうものがたり（応永7年(1400)）に「善光寺の南大門および裾花川の高島に履子を打つ所なし」と門前の賑わいが記されている。

門前の住人は、大工、仏師、絵師、遊女、琵琶法師、絵解き法師など善光寺如来に直接結縁して世俗を脱した人々で、農村とは異なった町の世界が善光寺門前に展開していた。室町時代には、善光寺信仰と戸隠・飯縄信仰が一体となり、多くの参詣者を集めた。

こうした歴史的な経緯をもつ善光寺において、近年数え年で7年に一度ごと丑の年と未の年に催されるのが、善光寺前立本尊御開帳である。一般に御開帳とは、通常閉鎖されている仏殿の扉を開いて参拝するものであるが、善光寺の本尊である一光三尊阿弥陀如来いっこうさんぞんは、古くから絶対秘仏とされていることから、御開帳のときに人々が目にすること

ができるのは、本尊の身代わりとなる前立本尊^{まえだちほんぞん}である。

善光寺の御開帳には、他国に出て行く出開帳と善光寺で行う居開帳があり、このうち居開帳が現在主に行われている御開帳である。居開帳は、念仏堂で行われた不断念仏の節目を記念すること、出開帳を終えた如来を慰労すること、堂塔の造営や修築を記念することなどを目的に実施されてきた。近年では、長野商工会議所などで構成する奉賛会が、善光寺に開帳の申し入れを行う形になっており、善光寺信仰に加え、商業、観光振興の要素も大きくなってきている。

記録の残る最初の居開帳は享保15年(1730)で、善光寺宿問屋『小野家日記』に「如来御入仏以後の群衆なり」と大いに繁盛したと記されている。また、居開帳の様子分かる史料として、弘化4年(1847)の善光寺大地震における居開帳の絵図(『永井家文書』(嘉永元年(1848))長野市指定有形文化財)に華やかな居開帳が描かれている。

江戸時代の居開帳は、享保15年(1730)から幕末にかけて十数回行われていたものの、不定期の開催であった。現在のように数年で7年に一度と定期的な実施されるようになったのは、明治15年(1882)以降であり、太平洋戦争による混乱期を除いて現在まで途絶えることなく行われている。



「如来御遷座参詣群集之図」『永井家文書』(嘉永元年(1848)、長野市指定有形文化財)

イ 建造物

(ア) 善光寺

善光寺は、特定の宗派に属さない無宗派で、全ての人々を受け入れる寺として知られている。

a 善光寺本堂(国宝)

現在の本堂は、宝永4年(1707)に再建され、正面の柱間5間に対し、側面の桁行14間と縦長の建物で、建坪も国宝建造物の中で東日本最大級の大きさである。その平面は、外陣、内陣、内々陣が設けられ、屋根は総檜皮葺で撞木造という独特な形式である。



善光寺本堂(宝永4年(1707)、国宝)

b 善光寺三門(重要文化財)

三門(山門)は、寛延3年(1750)の建立で、本堂の正面に位置し、柱間が5間で戸が3つの木造二階建、入母屋造の二重門で、中央3間が通路になっている。また、屋根は、大正年間の葺き替え工事で檜皮葺となっていたが、平成の大修理でサワラ板を用いた榎皮葺に復元されている。



善光寺三門
(寛延3年(1750)、重要文化財)

c 善光寺経蔵(重要文化財)

経蔵は、宝暦9年(1759)の建立で、本堂の西側に位置し、柱間が5間四方の建物で、屋根は宝形造の檜皮葺である。内部は石敷で、中央に一切経が収められた八角形の輪蔵がある。



善光寺経蔵
(宝暦9年(1759)、重要文化財)

d 善光寺仁王門(登録有形文化財)

仁王門は、宝暦2年(1752)に再建されたものの、弘化4年(1847)の善光寺大地震及び明治24年(1891)の大火により焼失した。現在の仁王門は、大正7年(1918)に再建されたものである。柱間が3間、戸が1つの八脚門で、屋根は切妻造銅板葺で、正面に唐破風をもつ。



善光寺仁王門
(宝暦2年(1752)、登録有形文化財)

e 善光寺鐘楼(登録有形文化財)

本堂の南東にある鐘楼は、嘉永6年(1853)に再建された。屋根は、^{いりもやぶり}入母屋造^{ひわだぶき}檜皮葺で、6本の角柱が二重扇垂木の深い軒をもった屋根を支えている。銅鐘は、寛文7年(1667)に伊藤文兵衛金正が铸造したもので、高さ180センチメートル、口径116センチメートルあり重要美術品に認定されている。



善光寺鐘楼
(嘉永6年(1853)、登録有形文化財)

(工) 本坊と院坊

善光寺一山の本坊として天台宗の大勧進と浄土宗の大本願があり、大勧進の^{もと}下に25院、大本願の^{もと}下に14坊ある。善光寺の門前は、明治24年(1891)の大火により多くの建物が焼失したが、大勧進、大本願や院坊の中には焼失を免れた歴史的建造物が残り、善光寺と一体となり独特の景観を今に伝えている。



善光寺門前の院坊のまちなみ

a 大勧進

信州大学による善光寺及びその門前にある宿坊や仲見世、寺社等の建造物の調査(『善光寺とその門前』(平成21年(2009))によると大勧進には、寛政年間に建てられた建物として、表大門(寛政元年(1789))、赤門(寛政年間(1789-1801))、行在所(寛政11年



大勧進

(1799))などが残る。なお、大勸進の本堂にあたる萬善堂は、明治35年(1902)建立の木造平屋建、箱棟を載せた入母屋造瓦葺、正面に向拝を設けた建築である。

b 大本願

大本願では、光明閣が明治24年(1891)の大火を被っていない建造物(『善光寺とその門前』(平成21年(2009)))である。これは、歴代天皇の霊を奉っている建物で、木造平屋建、瓦で葺かれている。現在は、特別な法要などの際に使用されている。



大本願

c 世尊院釈迦堂

世尊院釈迦堂は、明治39年(1906)頃の建築(『善光寺とその門前』(平成21年(2009)))で、木造平屋建、入母屋造瓦葺である。建物に使用される部材に見事な極彩色の彩色が施されている。



世尊院釈迦堂(明治39年(1906)頃)

ウ 活動

(ア) 善光寺前立本尊御開帳

こうした歴史的建造物がひしめく善光寺で、数え年で7年に一度ごと催される御開帳は、仏都でもある本市の最大の祭りで、期間中は、全国から多数の参詣者が集まる。

善光寺は、古くから庶民に開かれた寺として、宗派を問わず全ての人々を受け入れてきたことで知られている。現在、法要をはじめとした寺務は、天台宗と浄土宗の二宗派の僧侶が共同で執り行っている。



善光寺の御開帳は、通常、新緑の季節である4月上旬から5月下旬頃まで約2ヶ月間催される。新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響から1年延期して開催された令和4年(2022)の御開帳は、感染防止対策として参詣者が分散して訪れられるよう期間を長くとり、4月3日から6月29日まで88日間にわたり行われた。

a 回向柱

善光寺の御開帳において回向柱は、次のような意味をもつ。前立本尊は、絶対秘仏である本尊の代わりに参拝者に公開されるものであるが、本堂奥の内々陣に安置されており、そのため、前立本尊から伸びた「善の綱」と呼ばれる綱で繋がれることで回向柱は、前立本尊の命を宿す。御開帳の期間中は、本堂前に建てられた回向柱に触れて前立本尊と御縁を結ぼうとする参拝者の長い列が見られる。

回向柱は、松代藩真田家が現在の善光寺本堂建立の普請奉行に当たった縁から、毎回松代地区から寄進される。令和4年(2022)の御開帳では、松代地区内に適当な用材がなかったため、長野県須坂市豊丘の山中から杉が切り出され、松代地区内の製材工場で化粧が施された。なお、本堂前に建てられる回向柱は、約45センチメートル角で高さが約10メートル、重さ約3トンにもなる。

令和4年(2022)の御開帳では、3月27日に回向柱受入式が行われた。柱は、善光寺本堂前に建立する回向柱と、世尊院釈迦堂前に建てる約6メートルの供養塔の2本である。世尊院釈迦堂前の供養塔も本尊の銅造釈迦涅槃像(重要文化財、鎌倉時代)の右手と結ばれる。



世尊院釈迦堂前の供養塔
(中日庭儀大法要(天台宗)での
世尊院釈迦堂法要の様子)

b 回向柱奉納行列

回向柱奉納行列は、回向柱を松代町内から善光寺まで運ぶ行列である。

行列は、真田十万石の大名行列を先頭にして、回向柱に繋がれた綱を引きながら、松代町内を練り歩いた後、市中心部に移動して善光寺本堂へ向け、中央通りを北上する。回向柱の奉納については、『長野商工会百年史』(平成12年(2000))に昭和30年(1955)から旧松代藩に伝わる十万石行列を加えて回向柱を受け入れるようになったとの記載がある。

通常であれば、奉納行列の経路には、柱に触れようとする人々で溢れかえるが、令和4年(2022)



史跡旧文武学校を出発する「回向柱奉納行列」

の御開帳では、新型コロナウイルス感染対策のため規模を縮小して行われた。

3月27日午前10時に、奉納行列、木遣り隊、そして通常であれば人が曳くところ、トラックに載せられた回向柱が列になって史跡旧文武学校を出発し、30分ほど松代町内を練り歩く。

午後に奉納行列は、市中心部に移動して長野商工会議所などをつくる御開帳奉賛会の役員も加わり、大門交差点付近で列を整え、仲見世通り、山門を抜け、善光寺本堂へ向けて進んでゆく。善光寺本堂前の受け入れ式では、回向柱寄進建立会会長から善光寺寺務総長に寄進目録が手渡された。



本堂前に到着した「回向柱奉納行列」

c 回向柱建立式

回向柱建立式は、御開帳が始まる2日前に行われる。善光寺本堂の大香炉前に組み建てられた滑車付きの2本の柱である蟬竿や木製手動ウィンチの神楽棧の伝統的な道具を使い、多くの参詣者に見守られる中、高度な技術をもつ職人たちの手作業により、ゆっくりと回向柱が建ち上がる。回向柱を建ち上げ始めてからおおよそ40分後、関係者や参詣者が見守る中、ついに本堂前の回向柱が、天に向かって真っ直ぐに建つ。

回向柱が建ち上がると、善光寺一山の住職による読経で、御開帳の安全無事と成功が願われる。



©善光寺



©善光寺

「回向柱建立式」

d 前立本尊御遷座式

前立本尊御遷座式は、御開帳が始まる前日に行われ、善光寺御宝庫から、御宝輦に乗せられた前立本尊が本堂へと向かう。御宝輦に乗せられた前立本尊は、厳かな雰囲気の中、ゆっくりと参道を進み、数え年で7年ぶりに本堂の内々陣に安置される。

続いて、回向柱開眼法要が行われて多くの参詣者が見守る中、回向柱を包んでいた白い布が取り払われる。



「前立本尊御遷座式」

e 開闢大法要

御開帳の初日は、早朝のお朝事をもって始まる。お朝事は、毎朝本堂で行われるお勤めのことです。はじめに天台宗のお朝事が行われ、続いて浄土宗のお朝事が行われる。お朝事に続き、天台宗、浄土宗の両宗により開闢大法要が営まれる。開闢とは、天地が開け始めて世界が始まることを意味する。



「回向柱開眼法要」

f 中日庭儀大法要

御開帳の期間中は、さまざまな行事が行われるが、その中で最も重要で大規模に行われるのが中日庭儀大法要である。これは、前立本尊を讀める法要で、天台宗と浄土宗により日を変えて回向柱前で行われる。令和4年(2022)は、浄土宗が4月23日、天台宗が5月7日に行った。

この法要における行列は、天台宗と浄土宗で内容が多少異なる。

浄土宗の行列は、大本願を出発した後、三門に向かって参道を進み、回向柱前で庭儀法要を行う。これまでは、このとき本堂前で稚児による礼讃舞を披露していたが、令和4年(2022)の法要では、新型コロナウイルス感染症対策のため礼讃舞の披露は行われなかった。続いて本堂内で法要を行う。その



「中日庭儀大法要」(浄土宗)

後、来たときと同じルートをたどって大本願に戻る。

天台宗の行列は、大勧進を出発し三門へと向かう。三門を抜けて回向柱前えこうばしらに着くと、そこで庭儀法要が執り行われる。続いて、本堂内で法要を行い、回廊を廻って散華が撒かれる。その後、参道を長野駅方面に進み仲見世通りの中ほどで左折し、世尊院せそんいんしゃ釈迦堂の前で法要が営まれる。この法要を終えると釈迦堂通りを南下して仁王門の本堂側の前に出て、参道を善光寺方面に向かって大勧進に戻る。



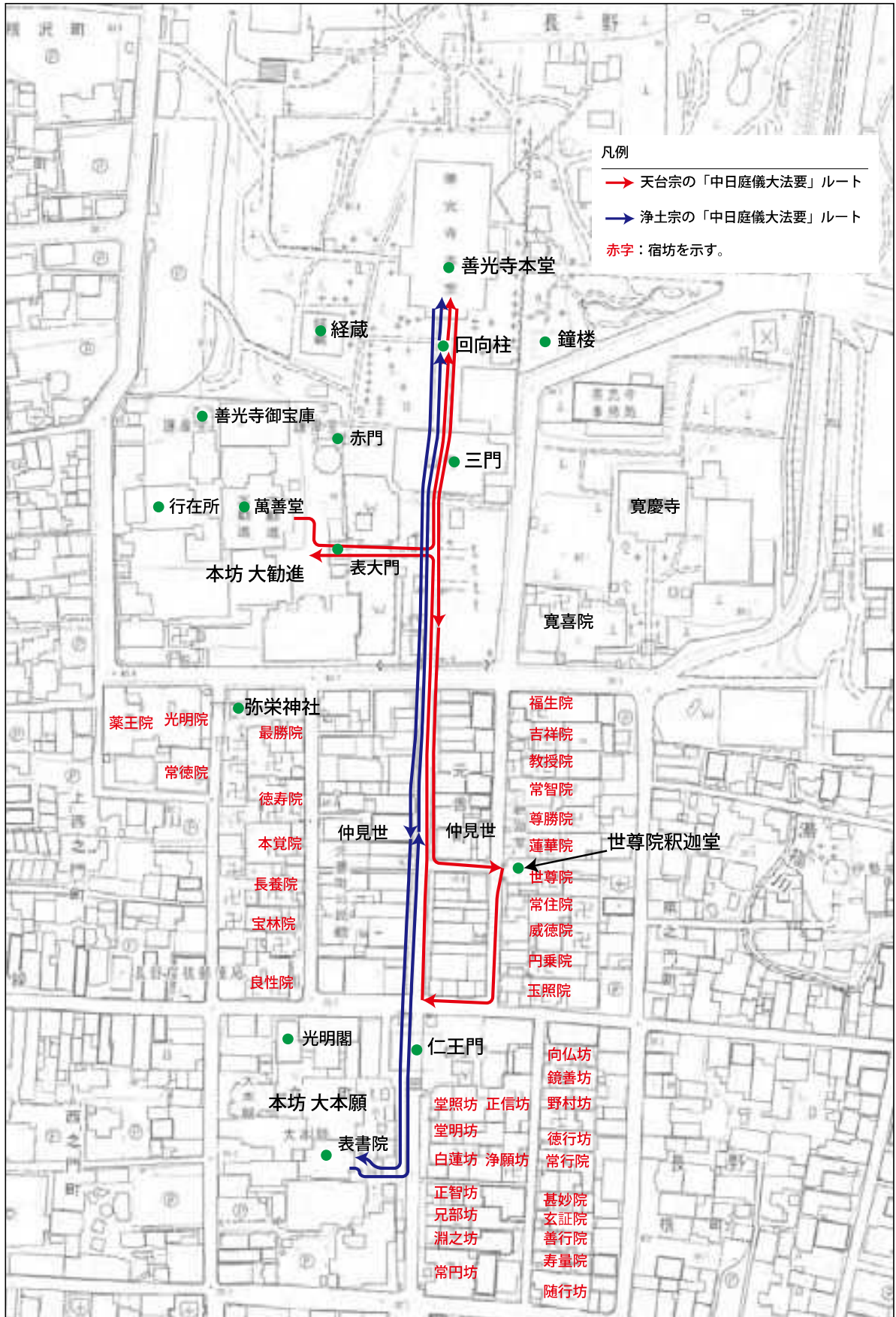
©善光寺

「中日庭儀大法要」(浄土宗)



©善光寺

「中日庭儀大法要」(天台宗)



中庭儀大法要ルート図(S=1:2,500)

g 結願大法要

このようにさまざまな行事が行われてきた御開帳は、結願大法要によって終わりを迎える。結願大法要は、御開帳の最終日に天台宗と浄土宗により本堂でそれぞれ営まれる。

続いて、前立本尊御遷座式が行われる。これは、御開帳前の前立本尊御遷座式とは逆に、前立本尊が白装束の男性が担ぐ御宝輦に乗って本堂から御宝庫へと還られるもので、これをもって御開帳が幕を閉じる。



「結願大法要」(天台宗)

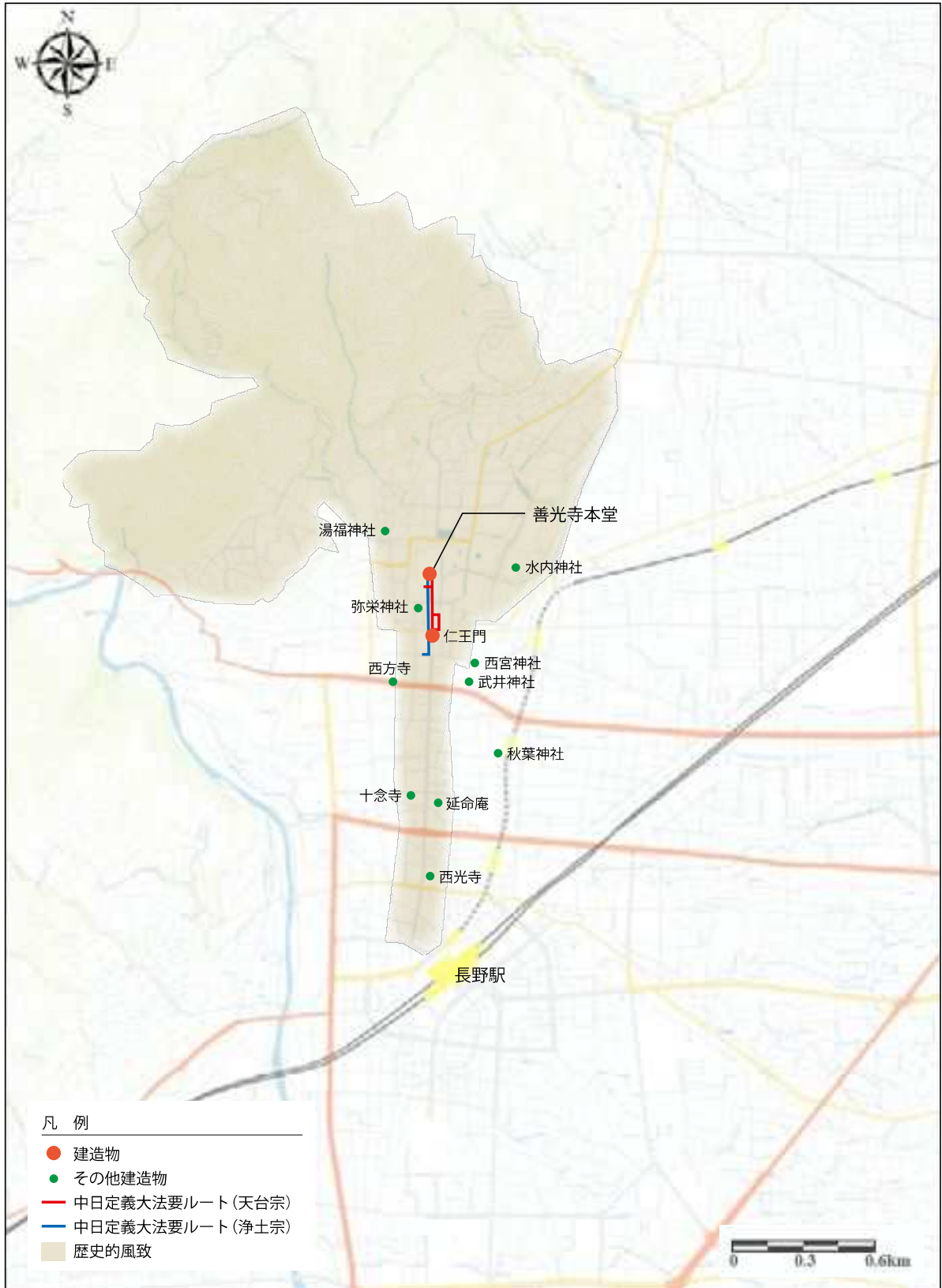
エ まとめ

古くから宗教や宗派にとらわれずに全ての人々を受け入れてきた善光寺の御開帳は、全国各地から多くの参詣者や観光客を集める。その一連の祭事は、関係者や周辺の人々のみならず、回向柱の抛出にみられるように、同じく歴史遺産が豊富な松代地区にも支えられ、現在まで途絶えることなく続けられている。また、善光寺の御開帳は、経済界にとって一つの周期基準にもなっており、御開帳に合わせて営業戦略、店舗改修計画、商品開発などの予定が組まれることが少なくないといわれる。

緑豊かな山並みを背景に、善光寺及びその周辺の歴史的建造物を中心に執り行われる善光寺前立本尊御開帳は、多くの人々の生活に深く関わる本市の特徴的な歴史的風致となっている。



「前立本尊御遷座式」



善光寺御開帳にみる歴史的風致範囲図(S=1/25,000)

牛に引かれて善光寺^{まい}詣り

むかし、善光寺から東に十里の村里に欲張りで信心薄いおばあさんが住んでました。ある日、川で布をさらしていると、どこからか一頭の牛が現れ、角にその布を引っかけて走って行くではありませんか。あわてたおばあさんは、布を取り戻したい一心で、牛の後を一生懸命追いかけました。走りに走って、おばあさんはついに長野の善光寺までたどりつきました。

ところが牛の姿を見失い、日もとっぷり落ちて途方に暮れ、仕方なく善光寺の本堂で夜を明かすことに。するとその夜、その夢枕に如来様が立ち、不信心をおさとしになったのです。目覚めたおばあさんは、今までの行いを悔いて善光寺如来に手を合わせました。その後、信心深くなり、たびたび善光寺に参詣に訪れるようになったおばあさんは、ついに極楽往生を遂げたといわれています。

一説には、おばあさんが家に戻ってみると、牛が引っかけていったはずの白布が観音様の肩にかかっていたともいわれています。それが、現在の小諸市にある布引観音だといわれています。

このような善光寺にまつわる伝説が残されています。



(2) 善光寺周辺寺社の祭礼にみる歴史的風致

ア はじめに

善光寺周辺には、善光寺と深い関わりをもつ寺社が多くある。弥栄神社は、京都の八坂神社を御本社とし、善光寺門前に宿坊が建ち並ぶ上西之門通りの一角にある。弥栄神社の社地は、安永3年(1774)に当時の善光寺本坊の大勧進住職によって寄進された。

弥栄神社の御祭礼では、善光寺門前の各町から曳き出された屋台による奉納屋台巡行が行われている。この屋台とは山車のことで、屋台の上で舞を披露するのが弥栄神社の御祭礼の特徴である。

また、美和神社、湯福神社、武井神社、妻科神社、加茂神社、木留神社、柳原神社は、善光寺七社と呼ばれている。このうち善光寺に近い湯福神社、武井神社、妻科神社の三社は、善光寺三社もしくは善光寺三鎮守と呼ばれ、戸隠の創建等が記された『戸隠山頭光寺流記』(県宝、室町時代中期)の「山中之外王子之事」に「井福・武井・妻成(科)御社之山王・善光寺之内白山一之護法也」とあり、特に崇敬されてきたことが分かる。

善光寺周辺の寺社は、弘化4年(1847)の善光寺大地震と明治24年(1891)の大火により甚大な被害を受けたが、復興を遂げ、善光寺周辺に形成された歴史的なまちなみの中で、地域住民により伝統的な祭礼が受け継がれている。

イ 建造物

(ア) 弥栄神社

覆屋に囲われた社殿は、境内の最も北寄りに位置している。覆屋は、木造平屋建、平入、切妻造瓦葺で、向拝柱も含めた外部はすべて漆喰で覆われている。建築年代は、弘化4年(1847)以前であることが判明(『善光寺とその門前』(平成21年(2009)))している。



弥栄神社の覆屋

(イ) 妻科神社

妻科神社は、善光寺の南西、妻科の中央北に位置している。平安時代初期からとみられる諏訪社系の古社とされ、『日本三代実録』（延喜元年(901)）貞観2年(860)の条に妻科地神と記されている。

本殿は、延宝7年(1679)建立の一間社流造、瓦葺屋根(『善光寺史研究』(平成12年(2000)))である。拝殿は、大正3年(1914)建立(『善光寺史研究』(平成12年(2000)))で、木造平屋建、平入、入母屋造銅板葺屋根、中央に唐破風のついた向拝が設けられている。



妻科神社(延宝7年(1679))

(ウ) 武井神社

武井神社は、善光寺の南東、東町に位置している。妻科神社と同様に諏訪社系の古社とされ、主祭神として建御名方命、相殿神として八坂刀売命、彦神別命が祀られている。

本殿と社蔵は、弘化4年(1847)の善光寺大地震で被害を受けた後、13年を要して再建された建物で、万延元年(1860)の建立(『善光寺史研究』(平成12年(2000)))である。本殿は、木造平屋建、平入、切妻造瓦葺屋根で、社蔵は、木造平屋建、平入、切妻造瓦葺屋根であった。現在の拝殿は、平成21年(2009)に平成22年(2010)御柱祭記念事業として建て替えられている。

武井神社(万延元年(1860))
上段は拝殿、下段は覆屋

(エ) 湯福神社

湯福神社は、善光寺の北西、箱清水の入口にあり、戸隠古道に沿った場所に位置している。妻科神社、武井神社と同様に諏訪社系の古社とされ、同社には、主祭神として建御名方命が祀られている。

社名の湯福は、伊吹を起源とし、風に関係のある語といわれ、そのため同社は、風神を祀る神社



湯福神社(文久2年(1862))

として信仰されてきた。境内の北に位置する本殿と拝殿は、文久2年(1862)に建てられた銅板葺屋根の建物(『善光寺史研究』(平成12年(2000)))で、本殿は切妻造、拝殿は入母屋造である。また、敷地北西にある土蔵に弥栄神社仮拝殿の部材が保管されている。

(オ) 健御名方富命彦神別神社(水内大社)

健御名方富命彦神別神社は、善光寺三社と同じ諏訪社系の古社で、善光寺の東、城山公園の一角に位置しており、地域では水内大社と呼ばれている。創建は古く、『日本書紀』(養老4年(720))下巻の持統天皇5年8月の条に、「辛酉に、使者を遣わして、龍田の風塵を信濃の須波(諏訪)水内(長野)等の神を祀らしむ」とあり、後者の水内(長野)が水内大社にあたる。

もともと善光寺本堂北側にあった年神堂(歳神堂)が、神仏分離令によって明治12年(1879)に現在地に遷されて健御名方富命彦神別神社となった。境内に明治17年(1884)に建てられた木造平屋建、平入、瓦葺銅板屋根の拝殿(『善光寺史研究』(平成12年(2000)))がある。このとき旧年神堂本殿は、守田迺神社(長野市高田)に移築されて長野市指定有形文化財になっている。

なお、水内大社のある城山公園は、かつて上杉謙信が陣を張った横山城の跡地でもあり、現在は、長野県立美術館や(仮称)長野こども館などの文化施設が併設された都市公園となっている。



水内大社(明治17年(1884))

(カ) 秋葉神社

秋葉神社は、武井神社の南東、権堂アーケードの入口近くに位置し、祭神として軻遇突智命を祀る。もともと同じ権堂町の往生院境内に小祠を奉祠していたが、弘化4年(1847)の善光寺大地震の難を受けて移転し、さらに明治27年(1894)に現在地へ移転した。敷地内に秋葉神社と刻まれた明治29年(1896)建立の石碑や明治37年



秋葉神社(明治30年(1897))

(1904) 建立の縁日記念碑が残っている。本殿は、慶応2年(1866) 建立とされる一間社流造で、向拝に唐破風が付き、海老虹梁には竜が巻きついた彫刻が施されている。拝殿は、明治30年(1897)に建てられたとされるもので、間口6間、奥行4間、平入、入母屋造瓦葺屋根である。

(キ) 院 坊

善光寺周辺には、本坊の大勸進(天台宗)のもとに25院、大本願(浄土宗)のもとに14坊の院坊がある。院坊は、一般に僧や参詣人の宿泊に当てられ、主に本尊が安置されている場、参詣者が宿泊する場、生活の場からなる。参詣者が宿泊する場と生活の場は一体の建造物で庫裡と呼ばれ、参詣者が宿泊する場が床面積の多くを占めている。本尊が安置されている場は、大御堂である善光寺に対して小御堂と呼ばれている。

現在みられる宿坊の多くが木造三階建、中には四階建のものもあるように高密度化、多層化しているのは、主に明治時代中頃の鉄道開通によって増えた参詣者を受け入れるためと考えられている。

a 常徳院(門) (登録有形文化財)

常徳院は、善光寺の院坊の一つで、大勸進のすぐ南西、弥栄神社と同じ上西之門通りに立地し、創立年月は不詳であるが、史料から寛文2年(1662)には創立されていたと考えられている。

敷地内には、明治24年(1891)の大火による被災を免れた門が残っており、現存する門は、明治初期にはすでに建てられていたと推測されている。間口一間二尺、切妻造、棧瓦葺の薬医門で、桁は男梁ではなく出三斗が支え、天井が張られていることが特徴的である。



常徳院(門) (明治初期、登録有形文化財)

ウ 活 動

(ア) 弥栄神社の御祭礼

御祭礼は、神の代理として選ばれた純真無垢な十歳前後の御先乗りと呼ばれる少年が、屋台巡行の先頭に立って各町を練り歩くことにより、夏の疫病を祓う祭礼である。

令和5年(2023)の御祭礼は、天王下ろし祭が7月7日に、宵山が7月8日、屋台巡行が7月9日、天王上げ祭が7月14日に行われた。屋台巡行は、権堂町、新田町、元善町が屋台を運行し、西後町と東町は屋台を曳かずに、置き屋台で参加して行われた。

弥栄神社の御祭礼は、『善光寺御祭礼絵巻』(真田宝物館所蔵、文政年間(1818-1830))に、晴れやかな屋台の姿とそれを曳く町人の様子が描かれており、この頃から、かなりの隆盛であったとみられている。

弥栄神社の社地が大勧進住職により寄進されたことから善光寺との関係が深く、弥栄神社の御祭礼は、善光寺の祇園祭とも呼ばれ、江戸時代は原則として大勧進の指揮の下で行われていた。現在も善光寺の僧侶が、天王下ろし祭と天王上げ祭の神事に参列している。



大勧進前を通る屋台
(『善光寺御祭礼絵巻』(真田宝物館蔵、文政年間(1818-1830)))

a 仮拝殿の組み立て、撤去

天王下ろし祭が近づくと、弥栄神社の社殿(覆屋)の前に仮設の仮拝殿が組み建てられ、天王下ろし祭と天王上げ祭の神事が、この仮拝殿で行われる。仮拝殿は、昭和22年(1947)から昭和23年(1948)頃の建築で、木造平屋建、妻入、切妻造鉄板葺であり、天王上げ祭が終わると解体、撤去され、その部材は、弥栄神社の北西に位置する湯福神社の境内に保管される。

b 天王下ろし祭

天王下ろし祭の神事は、7月7日に仮拝殿で宮司をはじめ、屋台巡行の御先乗り^{おさきの}を務める少年、善光寺関係者、持ち回りの年番町(令和5年(2023)は東之門町)、副年番町役員、妻科地区の役員、商工会議所の会頭、ながの祇園祭の実行委員長などの関係者が参列して行われる。かつて妻科^{つましな}にある聖徳宮^{しょうとくのみや}で天王下ろし祭が行われていた名残^{なごり}で妻科地区^{つましな}の役員が参列している。

神事は、太鼓の音とともに始まり、まず、神職^{のりと}が祝詞をあげる。次に、祓え^{はら}が行われ、宮司が神前に進み出て、天王下ろしの祝詞^{のりと}をあげる。宮司は、二拝二拍手一拝の後、玉串^{たまぐし}を奉獻し、続いて、御先乗り^{おさきの}、参列者の順で玉串^{たまぐし}を奉獻する。全ての参列者が玉串^{たまぐし}奉獻を終えると、太鼓の音とともに宮司以下の参列者が一拝し、宮司が神前に進み出て一拝した後、「オー」という声とともに神様を迎える。

最後に、仮拝殿に着座する参列者と仮拝殿の前に参列する全ての関係者、参拝者が一拝拍手をして神事が終わる。



天王下ろしの神事の様子

c 屋台巡行

明治維新や太平洋戦争等の一時期を除き、毎年行われていた屋台巡行は、戦後、経済的な理由や人手不足の問題から徐々に実施回数が減っていった。昭和40年(1965)から昭和42年(1967)までの間は松代群発地震の影響により自粛され、昭和43年(1968)に屋台巡行が再開された。そして、昭和45年(1970)5月12日に善光寺忠霊殿落成の協賛として、また、昭和48年(1973)に初めて善光寺御開帳にあわせて巡行が行われたが、以降、天王下ろし祭と天王上げ祭の神事のみが、毎年行われていた。

その後、平成21年(2009)の善光寺御開帳で10台の屋台が巡行して大きな賑わいを見せ、屋台巡行は平成24年(2012)から、ながの祇園祭屋台運行実行委員会が中心となって毎年実施されている。

御祭礼は当初、善光寺門前を中心に行われており、明治4年(1871)の御祭礼加盟町は、東町、岩石町、伊勢町、東之門町、大門町、西町、阿弥陀院町、天神宮町、桜小路、上西之門町、新町、横町の12町で、全て旧善光寺領の町であった。明治21年(1888)に善光寺の南方2キロメートルほどの位置に長野駅が開業して長野駅周辺が都市化してくると、徐々に善光寺から南に位置する長野駅に近い町が参加するようになった。

都市域は、幕末の『小市往還ヨリ善光寺ヲ見図』(嘉永元年(1848)、永井家文書、長野市指定有形文化財)では、善光寺門前と北国街道沿いの比較的限られた範囲に都市域がまとまっているが、次に『信陽善光寺境内及長野市町明細之図』(明治24年(1891))では、善光寺の西側に県庁をはじめとした主要官庁が建ち並ぶ姿が見えたとともに、長野駅の開業により都市域が徐々に南方に拡大していることが分かる。



『小市往還ヨリ善光寺ヲ見図』（嘉永元年(1848)、永井家文書）



『信陽善光寺境内及長野市町明細之図』（明治24年(1891)）

d 屋台

近年、人口減少の進展による担い手不足の問題もあって、旧善光寺領の町に参加を見合わせる町が出てきた。令和5年(2023)時点の屋台巡行加盟町は、上千歳町、上西之門町、北石堂町、権堂町、桜枝町、新田町、末広町、大門町、問御所町、西後町、西之門町、東後町、東鶴賀町、東之門町、東町、緑町、南石堂町、南千歳町、元善町の19町である。この19町のうち15町が、現在も屋台を所有している。さらに、かつて屋台巡行に加盟していた西町上、岩石町も屋台を所有しており、計17町が現在も屋台を所有している。

各町の屋台の多くは、屋台巡行のたびに組み立てられ、巡行を終えると解体して保管されている。組み立てられた状態で保管されている屋台は、西町上、緑町、新田町、西後町、問御所町、東町の屋台である。西町上の屋台は、寛政5年(1793)に制作された本屋台で、建材に檜けやきや檜ひのきを用い、全面黒漆塗りが施されており、昭和42年(1967)に長野市有形民俗文化財に指定されて長野市立博物館で展示されている。屋台は、その上で舞を披露する踊り屋台が特徴で、中には山崎儀作や和田三郎次といった郷土の匠による華やかな彫刻が施されたものもある。

令和5年(2023)の屋台巡行に参加した町の屋台の特徴は以下のとおり。

権堂町の屋台は、大正2年(1913)に田町の和田三郎次によって造られた踊り屋台で、善光寺周辺の屋台では唯一、上段が踊り屋台、下段が囃子方となる二層構造である。戦後から、屋台の先頭に勢獅子きおいじしが立ち、獅子と屋台の一組での巡行が恒例となっている。勢獅子きおいじしは、明治4年(1871)に長野県が誕生した際に、その年の天長節に長野県庁の勧めによって獅子頭、幌を下付されて舞ったのが由来とされ、長野市無形民俗文化財に指定されている。

新田町の屋台は、大正13年(1924)に造られた踊り屋台で、平成6年(1994)に補修された白木造りの屋台である。屋台と一対になるお囃子用の底抜け屋台を平成25年(2013)に復元している。

元善町は2台の屋台を保有している。1台は、大正時代制作の踊り屋台とお囃子用の底抜け屋台であり、屋台巡行では、もう



権堂町の屋台と勢獅子



新田町の屋台

1台の平成13年(2001)に伊勢町から預かり受けた江戸時代末期から明治時代初期にかけての制作で、柱は漆塗り、細部に多数の彫刻が施されている本屋台を使用している。

西後町の屋台は、幕末から明治に活躍した妻科村の山崎儀作によって明治5年(1872)に制作された総檜造りの本屋台で、天井、欄間、破風に緻密な彫刻が施されている。

東町の屋台は、明治5年(1872)に山崎儀作によって制作された本屋台で、舞台天井に金箔の松に鷹のほか、破風、入額、欄間に一本彫りの彫刻があり、屋根や柱に黒漆塗りが施されている。



元善町の屋台



西後町の屋台



東町の屋台

そのほか、現存する屋台の種別や制作年などは下表のとおり。

町	屋台種別	制作年	保存形態	制作
桜枝町	本屋台	明治29年(1895) 10月	解体	山崎儀作
西町上	本屋台	寛政5年(1793)	組立	
西之門町	踊り屋台	明治26年(1893)	解体	
	底抜け	不明	解体	
栄町	本屋台	明治36年(1903) 7月	解体	
元善町	踊り屋台	大正8年(1919)	解体	
	底抜け	不明	解体	
	本屋台	江戸末～明治初期	解体	山崎儀作
東之門町	二階建て	大正末期	解体	

町	屋台種別	制作年	保存形態	制作
伊勢町	踊り屋台	不明	解体	
	底抜け	不明	解体	
岩石町	踊り屋台	不明	解体	
	底抜け	不明	解体	
東町	本屋台	明治5年(1872)	組立	山崎儀作
大門町上	踊り屋台	大正3年(1914)頃	解体	
	底抜け	不明	解体	
大門町南	本屋台	安政6年(1859)	解体	山崎儀作
東後町	踊り屋台	大正7年(1918)	解体	
問御所町	本屋台	明治5年(1872)	組立	山崎儀作
権堂町	二階建て	大正2年(1913)	解体	和田三郎次
南千歳町	本屋台	昭和5年(1930)	解体	
上千歳町	踊り屋台	昭和初期	解体	
緑町	本屋台	明治初期?	組立	北村喜代松と一門
西後町	本屋台	明治5年(1872)	組立	山崎儀作
新田町	踊り屋台	大正13年(1924)	組立	
	底抜け	不明	組立	
南石堂町	踊り屋台	昭和12年(1937)	解体	
北石堂町	本屋台	昭和11年(1936)	解体	

横沢町には、明治6年(1873)制作の笠鉾が10基あり、長野市立博物館に寄託收藏されている。網掛けしたものは、平成28年(2016)度の調査により処分が確認されたもの

e 屋台巡行の順路

各町の屋台は、午前9時の巡行開始に向けて、各町の会所を早朝に出発し、各々の順路を取りながら出発地のセントラルスクウェアに集合する。セントラルスクウェアは、平成10年(1998)開催の長野冬季オリンピックの表彰式会場として使用された施設を都市公園として再整備した施設である。

御先乗りの一行は、午前8時の鏡開きのあと弥栄神社を出発し、仲見世通りを南

下する。善光寺仁王門を通過して真っ直ぐ中央通りを南下し、各町の屋台が待機するセントラルスクエアを目指す。

御先乗りの一行と各町の屋台が揃うと、いよいよ屋台巡行が始まる。

午前9時、御先乗りが注連縄を太刀で切り落す注連縄切りが行われると各町の屋台は、各町の役員を従えて馬に乗る御先乗りの一行に先導されて中央通りを進んでいく。

御先乗りの一行は、弥栄神社御祭礼と善光寺祇園祭の幟を先頭に、長刀鉾を表す長印の旗、善光寺大勧進の車柄杓、大本願の月章を持つ白丁、御先乗り、その後ろに屋台巡行加盟町の役員が一行になり、善光寺三門を目指して雅やかの中にも威風堂々と中央通りを北に進んでいく。そして、御先乗りの一行に続いて、権堂町、新田町、元善町の順に屋台が出発する。

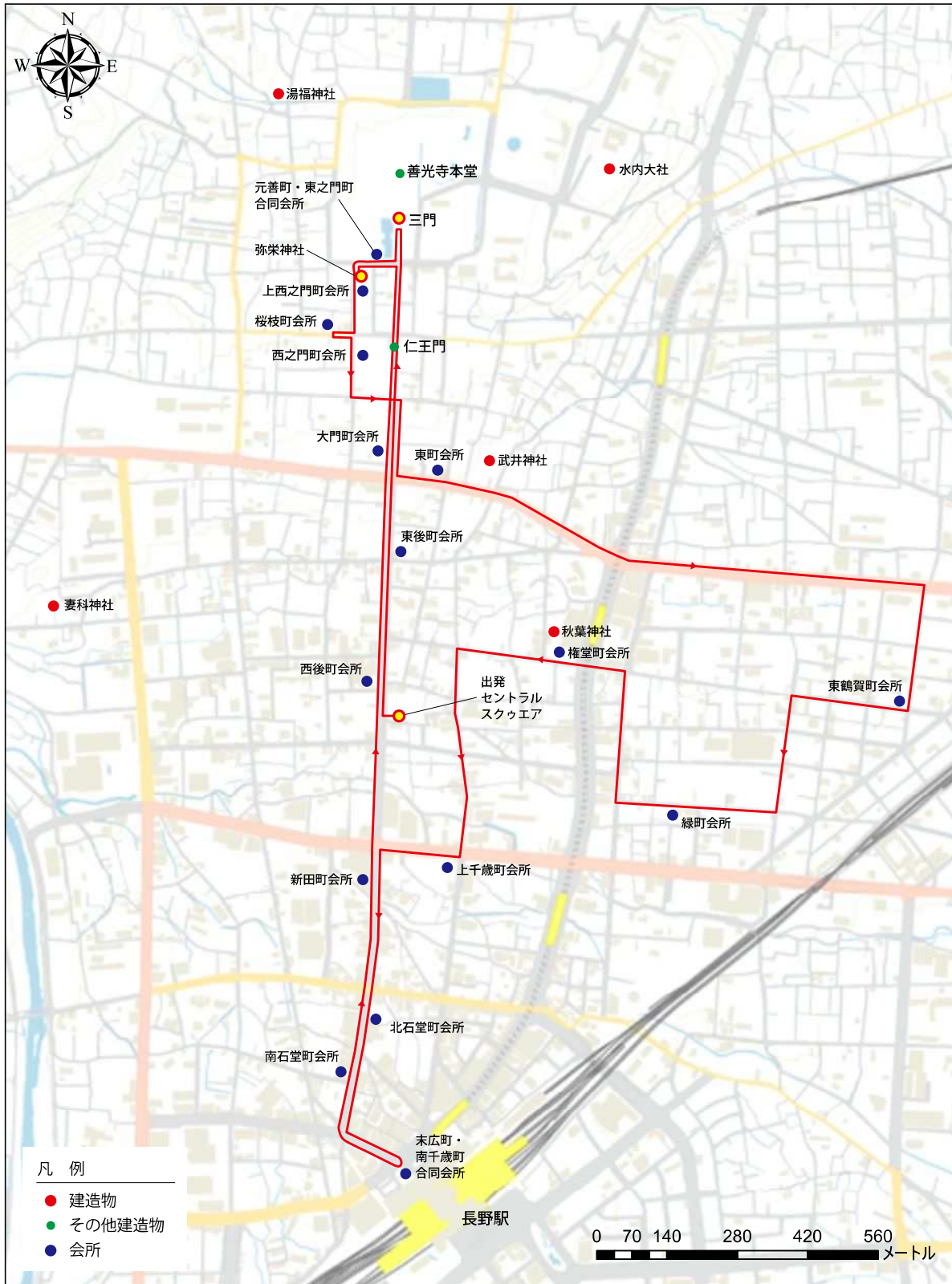
屋台が巡行する中央通りは、かつての北国街道であり、明治時代以降は商業の中心地として栄えてきた通りである。北国街道は、正確には中央通りを登りきったところを横町へ右折し、さらに東へ進み岩石町へとかかる。突き当たりが恵びす講で知られる西宮神社で、そこから道は直角に左折して北方へ延び、戸隠道と交叉して右折し、東へ延びていく。この辺りの北国街道沿いには、歴史的まちなみが多く残る。

屋台が三門に近づくとつれ、徐々に歴史的建造物が増えていき、門前町の雰囲気が増していく。この地域は、大門町南地区と呼ばれ、長野市景観計画において景観計画推進地区に指定されている。善光寺周辺一帯は、景観計画により建築物の高さ制限が設けられているとともに、善光寺を中心とした区域は、風致地区に指定されて良好な景観が保全されている。

中央通りを三門に向かって進んできた各町の屋台は、善光寺境内に入り、門前の景観を特徴づける院坊が建ち並ぶ参道を進んでいく。そして、大本願前を通過して仁王門をくぐると、まちなみが仲見世の店舗に変わっていく。かつて本堂は、現在の仲見世のある場所に建っていたが、宝永4年(1707)に現在地に建てられた。本堂があった場所は堂庭と呼ばれる広場となり、参道に沿って建物が建つ程度の市が開かれていたが、参詣者が多くなる近代以降に、現在のように街区が形成されて常設の店舗が建ち並ぶようになった。

現在、仲見世には、旅館や土産物、仏具などそれぞれの店舗が個性豊かなファサードを構えている。仲見世では、現在も「建物を仁王門より高くしてはいけない」など、善光寺に配慮した建築上の規制が口承されており、個々の店舗が個性的なファサードを構えながらも、まとまりのあるまちなみが形成されている。

仲見世の店舗群を抜けて駒返り橋通りを渡ると、左手に大勧進を見つつ、屋台は



屋台巡行の順路図(S=1:10,000)

三門前に到着する。大勸進貫主と大本願上人の高僧をはじめ威儀を正した院坊の僧侶たちが居並ぶ前で、各町はここで舞を奉納し、答礼を受ける。

その後、御先乗りの一行と各町の屋台は、弥栄神社を南下して大本願の角を曲がり、町なかの悪疫を祓うために参加町の会所を巡行していく。各町の屋台は、大本願の南を通過して中央通りに入るまで御先乗りの一行と同じ順路をとり、その後、会所で舞を披露しながら各町の運行順路に従って中心市街地を巡行していく。

f 天王上げ祭

屋台巡行を終えて、天王上げ祭が7月14日に行われる。天王上げ祭の神事は、概ね天王下ろし祭と同様であるものの、天王下ろし祭では、神様を迎えるために社殿の御扉を開いていたものが、天王上げ祭では、神様を送るために御扉が閉められる。この神事をもって弥栄神社の御祭礼が終了する。

(イ) 茅の輪くぐり

茅の輪くぐりは、毎年、妻科神社で6月下旬、湯福神社で6月28日に行われる。茅の輪くぐりは、宮中行事である大祓の一環の神事から起こった行事で、明治時代以降に全国的に行われるようになった。大祓は、犯した罪や穢れを除き去るために、年2回、6月と12月の晦日に行われている。6月の大祓を夏越の祓え、12月の大祓を年越の祓えという。夏越の祓えで行われるのが、茅の輪くぐりであり、茅で編んだ直径2メートルほどの輪をくぐり、厄災を払い無病息災を祈願する。

a 湯福神社の茅の輪くぐり

湯福神社では、昭和13年(1938)頃から茅の輪くぐりが行われるようになった。茅の輪くぐりは、午後1時から3時までの約2時間、善光寺周辺の15町(横沢町、立町、伊勢町、東之門町、西之門町、栄町、上西之門町、狐池町、深田町、桜枝町、箱清水町、花咲町、御幸町、往生地町、元善町)の氏子総代と各区長が中心となって執り行われる。以前は、関係者以外この神事に訪れる人は少なかったものの、現在は、多くの地域住民が訪れている。

神事に先立ち、四方に竹を立てて注連縄を張った祭壇が本殿前に設けられ、米、お神酒、野菜、魚、塩、果物



大祓の儀式のようす

といった供物が供えられる。また、以前は、神事の名称どおり茅を使用していたが、現在は竹で作られた直径2メートルほどの茅の輪が本殿の前に置かれる。

宮司を先頭に氏子総代、区長一列となって、神社入口の手水所で手を洗い清め、祭壇前に整列した後、神事は、宮司が人形を三方に載せて、祭壇で大祓の儀式を行うことから始まる。人形とは、人の形にかたどられた紙のことで、これに自身や家族の名を書き込み、さらに息を吹きかけることによって、半年分の穢れが託されることになる。儀式では、大祓詞が参列者に配られ、参列者も一緒になって祝詞をあげる。

続いて、茅の輪くぐりが行われる。人形が載る三方を掲げた宮司が、境内いっばいに8の字を描くように、左、右、左と回り、合計3回輪をくぐる。宮司に続いて、氏子総代と各区長、その後に続いて一般参拝者が輪をくぐっていく。

最後に、湯福川にかかる橋の近く置いたかがり火で人形を焚き上げて厄払いをする。かつては、この川に人形を流して厄払いをしていたといわれている。



茅の輪をくぐる

(ウ) 御射山祭

御射山祭は、全国各地にある諏訪神社の総本社である諏訪大社の上社(諏訪市、茅野市)と下社(下諏訪町)で行われてきた伝統的な祭礼で、元々は、御射山という山に茅萱(ススキあるいは尾花)で葺いた臨時の仮屋(穂屋)に、2日から4日ほど参籠して山宮の神霊に対する厳重な祭祀を行うとともに、これに伴う御狩りの行事を行ったものである。

毎年、武井神社では8月26日に、湯福神社では8月27日に御射山祭が行われている。善光寺周辺の諏訪社系の神社だけでなく、全国各地の諏訪社系の神社で御射山祭が行われており、善光寺三社は、いずれも諏訪社系であるが、現在行われているのは、武井神社と湯福神社で、中でも武井神社では盛大に行われている。現在でも御射山祭の日に、ススキの穂で作った神箸で食事をする習慣があり、これはその伝統を踏まえたものである。

a 武井神社の御射山祭

『信濃宝鑑(中巻)』の武井神社を描いた明治33年(1900)の絵図に「御射山祭ト唱フルアリ。毎年八月廿六廿七ノ両日ヲ以テ之レヲ行フ。」とあることから、武井神社では、明治33年(1900)以前から御射山祭が行われていることが分かる。また、『齋藤神主家年中行事録』(弘化5年頃(1848))に、湯福神社の御射山祭に関する記述がみられる。



村社武井神社之景(明治33年(1900))

武井神社では、すすきの穂と箸が頒布される。すすきの穂は、各々の家の神棚等に供えられ、翌朝27日にすすき箸で小豆御飯を食べると、一年中無病息災で過ごすことができるといわれている。また、子供たちの無事育成、家内安全、商売繁盛を祈願する祭礼でもある。

この祭りに重さ約2トンの東町の宮神輿が登場する。神輿は、問屋街として栄えた土地柄も重なり、昭和40年(1965)頃まで毎年、町独自で盛大に担がれてきたが、人口減少や住民の高齢化などで担ぎ手が足りず、その後、30年近く蔵に眠ったままであった。しかし、年々、神輿の復活を願う声が高まり、地域外からの応援もあって平成8年(1996)に神輿が再開された。令和5年(2023)の御射山祭では、多くの担ぎ手が集まって威勢良い掛け声とともに神輿渡御が賑やかに行われ、現在も熱気ある祭りが続けられている。



神輿渡御の様子

(工) 御柱祭おんぼらさい

諏訪大社では、数え年の7年に一度、寅年さると申年おんぼらさいに御柱祭が行われる。善光寺周辺では、善光寺三社つましな(妻科神社、たけい武井神社、ゆぶく湯福神社)に水内大社みのちを加えた四社が交代して、諏訪大社と同様に寅年さると申年おんぼらさいに御柱祭を行っている。

最も古い御柱祭おんぼらさいの記録は、嘉永7年(1854)3月に妻科神社つましなで初めて御柱祭おんぼらさいが行われたことが記されている『嘉永七甲寅年三月十五日於妻科神社御柱祭事行列帳』(嘉永7年(1854))である。その様子が描かれた絵馬が、妻科神社つましなに保存されている。また、武井神社たけい拜殿に掲げられた縦120センチメートル、横350センチメートルの四枚の大絵馬のうち一枚の大絵馬(長野市指定有形文化財)に、万延元年(1860)に行われた武井神社たけいの御柱祭おんぼらさいの様子が詳細に描かれている。



御柱祭行列図大絵馬(万延元年(1860)、市指定有形文化財)

史料や絵馬で明治17年(1884)の水内大社みのちから明治35年(1902)の武井神社たけいまで4社で順番に挙行したことが分かることから、少なくとも明治時代以降には、妻科神社つましな、武井神社たけい、水内大社みのち、湯福神社ゆぶくの4社が、数え年で7年に一度ごと交代で御柱祭おんぼらさいを行うようになったと考えられている。

その後、御柱祭おんぼらさいの挙行が不明な年があるものの、昭和49年(1974)以降は概ね継続されており、近年は、平成16年(2004)に妻科神社つましな、平成22年(2010)に武井神社たけい、平成28年(2016)に湯福神社ゆぶくで行われた。

年 月	神 社	
嘉永7年(1854) 3月	妻科神社	絵馬
万延元年(1860) 4月	湯福神社	絵馬
明治17年(1884) 5月	水内大社	
明治23年(1890) 5月	湯福神社	
明治29年(1896) 5月	妻科神社	絵馬
明治35年(1902) 5月	武井神社	
大正9年(1920) 10月	妻科神社	絵馬
大正15年(1926) 5月	武井神社	絵馬
昭和7年(1932) 4月	水内大社	
昭和49年(1974) 10月	妻科神社	
昭和55年(1980)	—	武井神社の遷宮祭
昭和61年(1986) 6月	武井神社	絵馬
平成4年(1992) 10月	湯福神社	
平成10年(1998) 9月	水内大社	絵馬
平成16年(2004) 10月	妻科神社	
平成22年(2010) 9月	武井神社	
平成28年(2016) 10月	湯福神社	
令和4年(2022) 9月	水内大社	絵馬

史料や記録が残る4社の御柱祭おんぼらさい

令和4年(2022)の御柱祭おんぼらさいは、9月10日に水内大社みのちで行われた。御柱おんぼらは、壹之柱いちのぼらと
 貳之柱にのぼらの2本で、直径が約40センチメートル、長さが約10メートルで、それぞれセ
 ントラルスクウェアから曳行えいこうされた。

a 御柱の曳行

御柱の行列は、セントラルスクエアを午後1時30分に出発し、大祭旗、木遣り、神職を乗せた馬、氏子らが連なり、盛大に御柱を曳行する。

先に壱之柱が、東之門町、新町、岩石町、淀ヶ橋、三輪田町、元善町、箱清水、東町、横山、本郷、相ノ木西、相ノ木東、返目、上宇木、下宇木の主に国道406号の北側の町の氏子により曳行される。続いて、弐之柱が、上千歳町、田町、東後町、東鶴賀町、緑町、居町、西鶴賀町、問御所町、南千歳町、権堂町、南県町、鶴賀七瀬町、七瀬の国道406号の南側の町の氏子により曳行される。

御柱の行列は、セントラルスクエアを出ると中央通りを北上し、善光寺仁王門をくぐり、仲見世通りを進んでいく。そして、石畳舗装や電線電柱類地中化などが進んだ駒返り橋通り、御幸坂通りを経て水内大社に到着する。

御柱が水内大社に到着して冠落としの後に御柱の頂部に薙鎌が打たれると、いよいよ建御柱が行われる。薙鎌は、龍の落とし子の形をした薄い鉄製の板のことで、風をなごめる呪宝とされる。そして、大勢の人々が見守る中、御柱は、壱之柱、弐之柱の順に、ゆっくりと拝殿の前に建てられる。御柱が建つと大きな歓声と拍手上がり、その後、神楽の奉納、拝殿内で神事が行われて一連の祭事が終了する。



セントラルスクエアを出発する



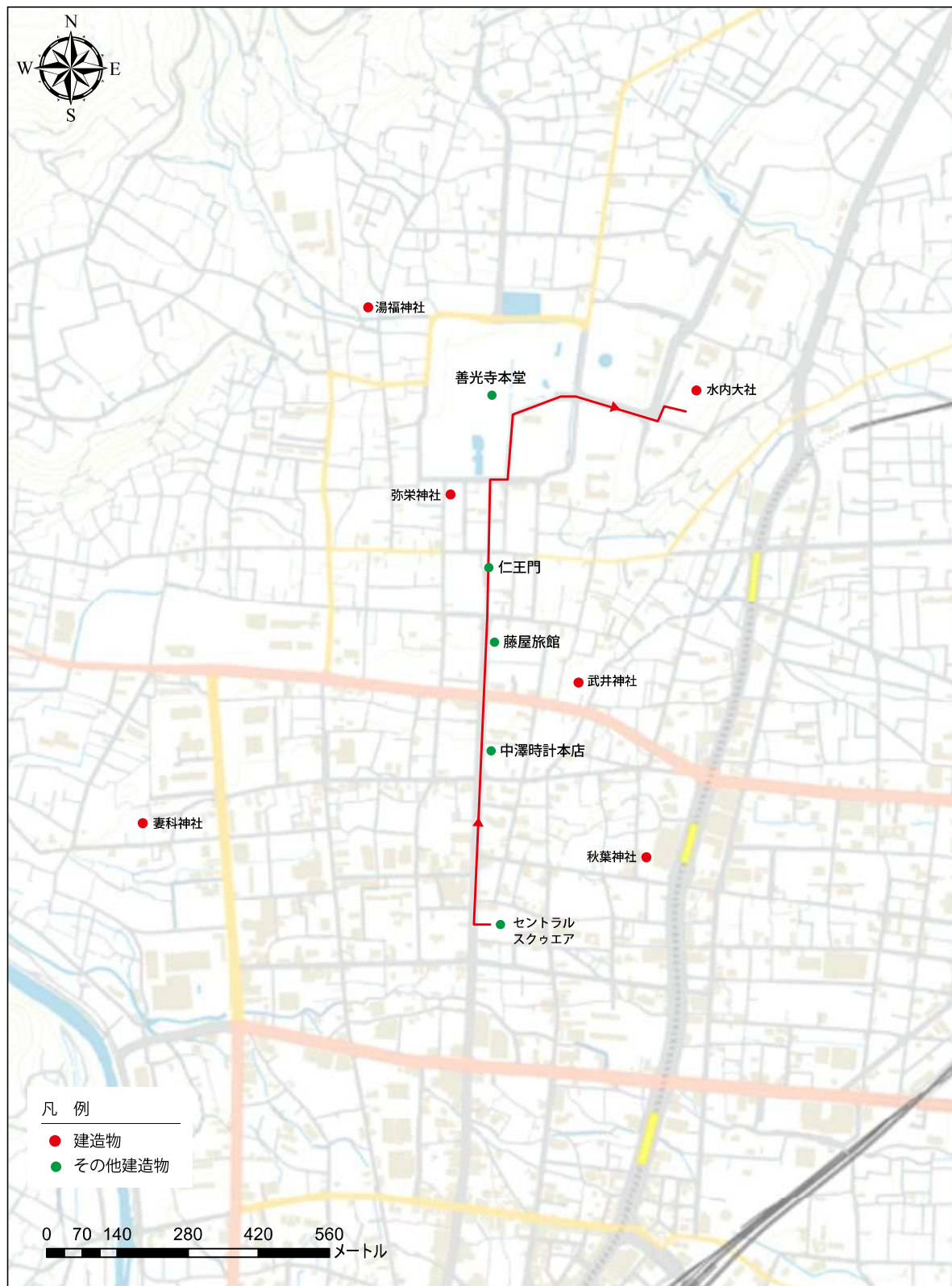
中央通りを進む御柱の行列



御柱に薙鎌が打たれる



大勢の人々が見守る中、御柱が建つ



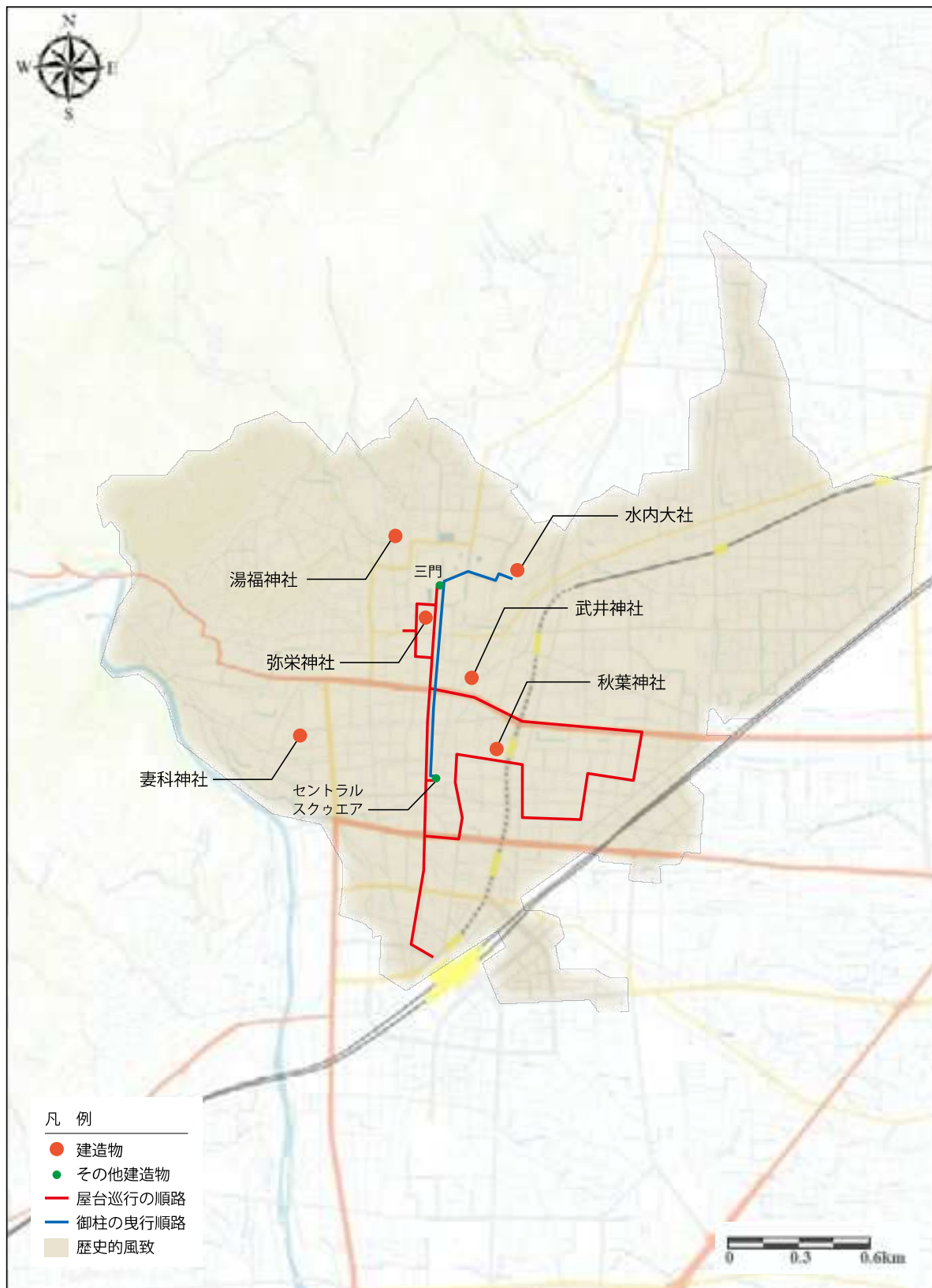
御柱の曳航順路 (S=1:10,000)

エ まとめ

善光寺門前には、高密化、多層化した宿坊建築の歴史的まちなみが広がり、また、善光寺三社をはじめ、長い歴史をもつ寺社が点在している。善光寺周辺の寺社で行われる祭礼は、善光寺門前に成り立った各町の往時の隆盛がしのばれ、休止の時期があるものの、地域住民によって今に受け継がれている。

また、水内大社^{みのち}には、市内の専門学校の学生が作成した平成10年(1998)挙行の御柱^{おんぼしら}祭の絵馬が掲げられており、現在、同じようにして令和4年(2022)の御柱祭^{おんぼしらさい}の絵馬が作成されたほか、屋台巡行でも毎年のように大学生が担い手として参加している。

このように、幅広い世代に支えられ、歴史ある寺社で行われる祭礼に、まちなみと一体となった良好な歴史的風致を見ることができる。



善光寺周辺の祭礼にみる歴史的風致範囲図(S=1/25,000)